

〔研究ノート〕

介護福祉士養成課程における中期実習から見る学生の 技術面・精神面の到達度 ～中期実習後の振り返りから見る本科生と委託生の比較～

相馬陽子¹⁾

要 旨

本研究では、現在、弘前医療福祉大学短期大学部生活福祉学科介護福祉専攻で「介護総合演習Ⅲ」の実習の振り返りで学生に記入してもらっているアンケートを使用し、「生活支援技術Ⅰ」「生活支援技術Ⅱ」での介護技術を習得した直後の中期実習に焦点を当て、本科生と委託生の技術面・精神面について振り返り比較し、双方の課題を明らかにすることを目的とした。また、双方に共通する部分、比較する部分をデータから分析・考察し、それを踏まえ「介護総合実習」の振り返りアンケートの見直し、今後への課題を明らかにするとともに、後期実習へ向けての効果的な教育のあり方に役立てたい。

キーワード：介護福祉士、介護実習、介護技術

I はじめに

厚生労働省が示す介護実習の目標¹⁾は次の通りである。

①個々の生活リズムや個性を理解するという観点から、様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、他職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する学習とする。

②個別ケアを行うために個々の生活リズムや個性を理解し、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画を作成し、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する学習とする。

弘前医療福祉大学短期大学部生活福祉学科介護福祉専攻（以下、本学とする）は、介護福祉士養成校の2年課程である。実習時間は450時間であり、内訳としては、1年次前期実習（90時間）、2年次中期実習（180時間）、2年次後期実習（180時間）となっており、それぞれ介護老人福祉施設、介護老人保健施設、障がい者支援施設の実習施設で実習が実施されている。また、本学の中期

実習目標として、①利用者・家族とのコミュニケーションの実践を通して、個々の生活リズムや個性を理解し、介護技術の確認をする。②個別ケアを行うために、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者の課題を明確にする。③利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開する。④他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する。⑤既習の基礎的介護技術を応用し、実践することを通して、介護の基本の確認をする。⑥余暇生活活動に参加し、利用者と共に楽しみながら、対応の仕方を学ぶ。と、実習の手引き²⁾にも記載されている。

今回は中期実習に焦点を当て、本科生、委託生の共通点、相違点を分析し、導かれる課題を明らかにしていく。そこから、後期実習に向け何が必要なのか・何が重要視されるのかを抽出し、実習の指導方法の改善を目指したい。

（※委託生…厚生労働大臣が指定した介護福祉士養成施設で規程のカリキュラムを履修し、介護福祉士の資格を取得し、介護福祉士としての再就職を目的とする受講生）

1) 弘前医療福祉大学短期大学部 生活福祉学科 介護福祉専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3丁目18-1)

II 方法

1. 対象者

本学生活福祉学科介護福祉専攻2年生40名（委託生14名・本科生26名）

2. 調査方法

集合調査法による自記式質問紙調査を実施した。2016年7月に学生に対して本調査の主旨を説明し、その場（授業中）で配布し、その場で記入してもらい回収した。回収時に欠席していた学生に対しては、後日同様の説明をし提出してもらう。40名の提出・回収（回収率100%）をもって、本研究の調査協力が得られたものとする。

3. 調査項目

実習終了後に、本学で授業時に実施しているアンケート用紙の質問事項を用いた。具体的な項目については以下のとおりである。

- (1) 前期・中期実習を通して、基礎的な生活行為の介護技術の自信はついたか。
- (2) 中期実習での介護過程の展開について。
- (3) 前期・中期実習を通して、自分が成長、変化したと思うことは何か。（複数回答可）
- (4) 実習配置学生数は何人が良いか。
- (5) 巡回回数は一週間1回となっているがそれよりよいか。もっと回数を増やしてほしいか。
- (6) 1回あたりの巡回時間は何分が良いか。
- (7) 施設の指導者にしてほしかったことは何か。（複数回答可）
- (8) 巡回教員に励まされたこと、要望はあるか。（自由記述）
- (9) 実習施設に要望すること。（自由記述）
- (10) 本学に要望すること。（自由記述）
- (11) 今回の実習でストレスを感じたことがあったか。

(12) あなたの自己評価を記入。

(13) 今回の実習で自分の目標は達成できたか、次回への課題は残ったか。

4. 分析方法

得られたデータは、質問項目ごとに単純集計した。項目によっては複数回答の集計もあり、また、自由記述項目に関してはそのまま記述し、比較分析できるようにした。

5. 倫理的配慮

対象学生に対し、本調査の主旨と方法、調査協力の任意性、不利益の有無、個人情報保護等について書面を用いて説明し、調査用紙の提出をもって同意が得られたものとした。

また、本研究は弘前医療福祉大学短期大学部の研究倫理委員会の承諾を得ている。

III 結果及び考察

1. 調査対象学生の属性

調査対象学生の属性を表1に示した。性別は40名中、男性が19名で48%、女性が21名で52%とほぼ変わらない数値を占めていた。年齢層は10代が最も多く26名であり、平均年齢は27.0歳であった。

表1 調査対象者の属性

性別	男性	19名	48%
	女性	21名	52%
年齢	10代	26名	平均年齢 (27.0歳)
	20代	0名	
	30代	3名	
	40代	10名	
	50代以上	1名	

2. 結果

(1) 「前期・中期実習を通して、基礎的な生活行為の介護技術の自信はついたか」について【表2】

表2

	自信がついた		まあまあついた		自信がない		未実習	
	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生
①体位変換・安楽な体位	2 (5%)	9 (22.5%)	5 (12.5%)	11 (27.5%)	4 (10%)	4 (10%)	3 (7.5%)	2 (5%)
②移乗・移動介助	2 (5%)	8 (20%)	7 (17.5%)	13 (32.5%)	3 (7.5%)	4 (10%)	2 (5%)	1 (2.5%)
③座位での食事介助	9 (22.5%)	12 (30%)	4 (10%)	14 (35%)	0	0	1 (2.5%)	0
④ベッド上での食事介助	2 (5%)	2 (5%)	1 (2.5%)	4 (10%)	0	1 (2.5%)	11 (27.5%)	19 (47.5%)
⑤水分補給	9 (22.5%)	10 (25%)	4 (10%)	14 (35%)	0	1 (2.5%)	1 (2.5%)	1 (2.5%)
⑥トイレ誘導	1 (2.5%)	4 (10%)	9 (22.5%)	12 (30%)	1 (2.5%)	5 (12.5%)	3 (7.5%)	5 (12.5%)
⑦おむつ交換	3 (7.5%)	9 (22.5%)	9 (22.5%)	9 (22.5%)	1 (2.5%)	7 (17.5%)	1 (2.5%)	1 (2.5%)
⑧（特浴）中介助	5 (12.5%)	3 (7.5%)	1 (2.5%)	5 (12.5%)	6 (15%)	5 (12.5%)	2 (5%)	13 (32.5%)
⑨（一般浴）中介助	5 (12.5%)	3 (7.5%)	3 (7.5%)	14 (35%)	4 (10%)	2 (5%)	2 (5%)	7 (17.5%)
⑩着脱介助	6 (15%)	5 (12.5%)	6 (15%)	13 (32.5%)	2 (5%)	8 (20%)	0	0
⑪足浴・手浴	4 (10%)	6 (15%)	0	6 (15%)	0	0	10 (25%)	14 (35%)
⑫ベッドメーカーキング	7 (17.5%)	10 (25%)	4 (10%)	14 (35%)	0	0	3 (7.5%)	2 (5%)
⑬コミュニケーション	9 (22.5%)	10 (25%)	5 (12.5%)	14 (35%)	0	2 (5%)	0	0
⑭記録	3 (7.5%)	4 (10%)	8 (20%)	17 (42.5%)	3 (7.5%)	5 (12.5%)	0	0

介護技術において委託生・本科生双方とも8割以上身についたと感じている生活行為は「自信がついた」「まああついた」が、③座位での食事介助(97.5%)⑤水分補給(92.5%)⑦おむつ交換(80%)⑫ベットメイキング(87.5%)⑬コミュニケーション(95%)⑭記録(80%)と6項目。ある程度自信はついたが中期実習ではまだまだ自信がないとの項目は、①体位変換、安楽な体位、②移乗、移動介助、トイレ誘導、排泄介助が7割を切っている。また本科生は、⑦おむつ交換(17.5%)⑩着脱介助(20%)を「自信がない」と苦手意識を持っている。頭では理解しているものの行動が伴っていない結果が得られる。委託生が苦手としている項目は⑧特浴介助(ほぼ5割)である。④ベット上での食事介助については「未実習」(75%)と、現場では離床して食事をとる為に体験していない。ベット上での食事となると体調を崩していると思われるため学生が介助することは考えづらい。⑪足浴、手浴についても対象者が決まっていると思われるため「未実習」(60%)が多くなっている。

実施した、実践したという結果は明白であるが、中期実習で身に付けておきたいすべての項目が達成できているかどうかまでは評価できていない部分である。

(2)「中期実習での介護過程の展開」について【表3】

①介護過程の展開については、委託生・本科生共に個別援助計画の対象者がほぼ自分の希望どおりに適した対象者の方だった。②の計画立案ができた時期については、委託生が3週目には出来上がっている状態だが、本科生は4週目と実習終了間際に出来上がっている学生も少なくない。計画立案に時間がかかっている様子である。にもかかわらず、後期実習では「なんとかできる」と自信をのぞかせている。

(3)「前期・中期を通して、自分が成長、変化したと思うことは何か」について

表4

	委託生	本科生		委託生	本科生
①明るさ	5	15	⑨妥協	1	3
②活発さ	2	5	⑩集中力	1	7
③積極性	6	12	⑪勉強意欲	4	6
④行動力	3	11	⑫会話力	5	16
⑤思いやり	6	16	⑬笑顔	7	17
⑥責任感	4	9	⑭決断力	1	2
⑦我慢	6	10	⑮観察力	11	15
⑧あきらめ	0	3			

(複数可)

前期実習・中期実習を通して自分がより成長・変化できたと思うところとし、委託生は⑬笑顔⑮観察力が半数を占めている。反面、変化したところでは⑦我慢することも学んだとしている。

本科生は、①明るさ③積極性⑤思いやり⑫会話力⑬笑顔⑮観察力が半数を占め、前期実習よりも明らかに成長できたと感じている。反面、少人数ではあるが変化したところで⑧あきらめ⑨妥協とネガティブ部分を感じている。委託生・本科生共に複数回答であった為、ばらつきの結果が出た。委託生の⑦我慢、本科生の⑧あきらめ⑨妥協については実習全体についてなのか、指導者の方についてなのか、利用者の方についてなのか、自分自身についてなのかははっきりしていない。

(4)「実習配置学生数は何人が良いか」について

表5

	1人	2人	3人	4人
委託生	4	2	7	1
本科生	2	9	9	6

実習配置の学生数については、委託生・本科生共に一施設数名の配置を希望している。「情報共有が出来お互い助け合える」「相談や愚痴や悩み等意見・アドバイスがもらえる」と理由を述べている。委託生の中には、一人がいいとし「マンツーマンで指導してもらえる」「一人だと自由にでき、集中できる」と実習に対する意欲が

表3

	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生		
①自分の希望が叶えられた利用者であったか	希望通りであった		希望外だが適していた		難しすぎた			
	9	17	2	7	3	1		
②計画立案ができた時期は	1週目		2週目		3週目		4週目	
	1	2	6	6	6	10	1	7
③施設でのカンファレンスは	役に立った		まあ役に立った		やらなかった			
	5	11	6	10	3	4		
④教員の巡回指導は	役に立った		まあ役に立った		役立たなかった			
	11	22	3	3	0	0		
⑤後期実習の計画立案はできそうか	できる		なんとかできる		難しい			
	3	5	10	20	1	0		

(本科生1名、介護過程実施できず)

大いに感じられる。逆に本科生は4割以上が多い配置人数を希望している。理由としては「いろいろな意見やアドバイスが聞ける」は同様であるが、「何より実習が楽しく過ごせる」とかなりのポジティブ思考である。一ヶ月間の長い実習を助け合って乗り切ろうという意欲の現われであると考えられる。

(5)「巡回回数は一週間1回となっているがそれで良いか。回数を増やしてほしいか」について

(6)「1回あたりの巡回時間は何分が良いか」について

表6

	はい	いいえ	1回	2回	3回
委託生	10	4	10	3	1
本科生	17	9	16	7	3

表7

	30分	40分	50分	60分	もっと多く
委託生	1	3	3	6	1
本科生	2	7	2	8	7

(5)の教員の巡回回数については週1回となっているが、「1回で満足している」と回答した学生は委託生・本科生共に6割以上を占めている。また、2割以上が2回を希望しているが、これは介護過程を進めるうえでアドバイスや相談に乗ってほしいとの願望から見えてくる結果である。本科生の3回は、教員に安心感・心地よさを求めているだけとも考えられる。

(6)の1回あたりの巡回時間はどのぐらいが良いかについては、「40分～60分」が委託生・本科生共に7割以上を占めている。ここでは、学生一人に対する面談、数名への面談、と分けての結果は得られていない。「60分以上」という本科生の数字は、(5)でも挙げたように教員に安心感・心地よさを求め、アドバイス・相談・愚痴等たくさん聞いてほしいとの願望であると感じ取ることが出来る。

(7)「施設の指導者にしてほしかったことは何か」について

表8

	委託生	本科生
①1人でやらせないでほしい	0	7
②自信がない時は見守りしてほしい	2	12
③できた時はほめてほしい	1	7
④当日、次の日までにコメントを書いてほしい	4	4
⑤やさしく指導してほしい	0	5
⑥指導の仕方を統一してほしい	6	14
⑦夜勤実習をなくしてほしい	2	1
⑧記録の時間を増やしてほしい	4	5
⑨その他	0	0

(複数可)

施設指導者に対する希望として委託生は④コメントは早めを書いてほしい⑥指導の仕方を統一してほしい⑧記録時間を増やしてほしい、と複数回答可であったがばらつきが見られた。本科生は①一人でやらせないでほしい②自信がない時は見守りしてほしい③できた時はほめてほしい⑥指導の仕方を統一してほしいと複数回答の結果が出ている。委託生・本科生双方とも⑥指導の仕方を統一してほしい、に関しては同意見であり半数を占める。毎日指導する職員が代わることへの戸惑いが隠せない様子の現われである。

(8)「巡回教員に励まされたこと、要望はあるか」について

委託生

- アドバイスが的確で助かった。
- 疑問、不安な部分を相談すると解決してくれた。
- 困っていることはないかと心配してくれた。
- 頑張っていると励まされた。自分たちの話を聞いてくれた。
- 実習の現場を見てほしい。
- 指導者がいない状態で巡回指導を受けたい。

本科生

- アセスメント、ケアプラン、愚痴、雑談等全てにおいて相談に乗ってくれた。
- 頑張れと励まされ、とても癒された。

委託生、本科生双方とも毎日緊張しながらの実習ではあるが「今日は先生が来る」というだけで、唯一ほっとした気持ちになれるひと時であると考えられる。巡回教員に対しては、安心感・心地よさを求める存在であるといっても過言ではない。

(9)「実習施設に要望すること」について

委託生

- 座学と実技のバランスが良かった。
- 説明をきちんとしてほしい。
- 実習生専用の部屋があると助かる。
- 放置しないでほしい。
- 指導に統一性がなかった。
- 統一した介護がなされていて職員の指導も的確だった。
- ケアプラン実施に当たり、時間が取りづらく、少し考慮してほしい。
- ケアプラン重視でなく、もう少し業務がしたかった。
- 実習生に対する職員同士の引き継ぎをきちんとしてほしい。

本科生

- 初めての利用者の場合、どこに注意して介助すればよいかきちんと指導してほしい。
- 何の説明もなく放置するのはやめてほしい。
- ケアプラン実施を多くやらせてほしい。
- もっと実践させてほしい。
- 指導職員によって対応が違う。

委託生、本科生双方とも念頭にあるべき理想とする介護福祉士のあり方よりも、現在の時点では自己中心的な意見の方が多い。また、委託生の中には「放置しないでほしい」と要望があり、指示待ち状態であるかのような意見も聞かれるが、本科生には全く見られない。

(10)「本学に要望すること」について

委託生

- 現場を見てほしい。
- アセスメントの仕方をもっと指導してほしい。

本科生

- コミュニケーションの授業を多くしてほしい。
- 実習配置前に希望を聞いてほしい。
- 実習前の実技試験は早めにしてほしい。

授業の中でのアセスメントについては、テキスト上のことであるため計画が立てやすいが、現場となると十人十色で勝手が違うために戸惑うことが多いようだ。特に委託生の方がいろいろと考えすぎ、上手く立案に繋がれないでいる。

(11)「今回の実習でストレスを感じたことがあったか」について【表9】

①約1ヶ月（中期実習）という、長期の実習であった為か40人中32人も学生が何らかのストレスを感じていたようだ。②ストレスを感じた時期については、委託生・本科生関係なく1週目から同人数の結果が出ている。本科生に限ると、日々過ごすごとにストレスが増しているようである。③精神面に関するストレスは委託生が半数を占め、本科生は半数以上を占めている。学習面・技術面・生活面については結果がまばらである。精神面で病んだ学生が、他のストレスにも特化しているように感じられる。④相談した相手は一人につき数名にも及んでいる。ストレスは感じていたが、誰にも相談することなく実習を終了した学生もわずかながらいた。⑤ストレスの理由については、

委託生

- 言葉の暴力があったように思う。
- 休憩が職員と一緒にあった為、様々な悪口を聞かされた。
- 連携が取れてないのか、指導がバラバラであった。
- 自己学習が負担だった。
- 緊張にて腰痛もあり、技術に不安がありストレスになった。

本科生

- 職員の対応の仕方にストレスを感じた。
- プレッシャーにストレスが溜まった。
- 職員同士の陰口がストレスになった。
- 利用者の方とうまくコミュニケーションができず、イライラした。
- 実習中、相談相手がいなかった。
- 施設までの移動が大変だった。
- 日勤が続きすぎて休みまで疲れが溜まった。
- 寝不足でストレスが溜まった。
- 認知症の方への対応が困った。

表9

①今回の実習でストレスを感じたことがあったか	は		い		いい		え	
	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生
	9	23	5	3				
②いつごろ感じ始めたか	1週目		2週目		3週目		4週目	
	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生
	6	6	2	8	1	7	0	2
③何についてのストレスですか	学習面		技術面		生活面		精神面	
	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生
	1	2	3	5	1	4	7	17
④誰かに相談したか（複数可）	友人		教員		施設配置の実習生		父親・母親	
	委託生	本科生	委託生	本科生	委託生	本科生	本科生のみ	
	2	9	4	7	6	8	13	
	相談しない							
委託生	本科生							
	2	3						

全体を通して身体的な疲れからくるストレスより、委託生・本科生双方とも精神的なストレスを多く感じている。また、施設職員間の人間関係等も耳にすることで、自分も同様に思われているのではないかと不安感も感じられる自由記述がある。ストレスに関する項目は、ストレス度チェックを詳細に得るため、介護技術を行う上で何に対するストレスなのかを細かく分類して調査すべきと考える。

(12)「あなたの自己評価を記入」について

表 10

	優	良	可	不可
委託生	3	10	1	0
本科生	0	13	12	1

中期実習の自己評価について委託生は14人中1人のみが「可」と評価し、他は「優・良」と高い評価を付けている。本科生は「優」は1人もおらず、「良・可」が半々の状況であり、控えめな評価を付けている。中期実習中に経験、身についたことは全てにおいての自信に繋がる。これは、後期実習に向けての前向きな結果であると感じる。

(13)「今回の実習で自分の目標は達成できたか、次回への課題は残ったか」について

表 11

	委託生	本科生
達成できた	8	18
達成できなかった	3	3
回答なし	3	5

委託生・本科生共に中期実習での自分の目標は達成できたとしている。後期実習に向けての課題については、

委託生

- 計画的に個別援助計画を作成し、完成させる。
- 苦手な実技面を重点に頑張る。

本科生

- コミュニケーション能力を身につける。
- 麻痺、拘縮者への対応を丁寧に行う。
- 声が小さいので相手に聞こえるようにする。
- 計画的に個別援助計画を作成する。
- 着脱介助が苦手なため、もっと練習する。
- 移動、おむつ交換を克服する。
- 実技を重点的に頑張る。
- 気を引き締め、集中して行動するよう心がける。

個別援助計画については、中期実習でスムーズにいか

ない部分であったと思われる。委託生・本科生共に後期実習は、個別援助計画に力を十分に注ごうとする意欲が強く感じられる。本科生については、まだまだコミュニケーションに自信が持てないようである。

IV 結論

1. 委託生・本科生双方において「自信がついた」「まああつた」という基礎的介護技術は、③座位での食事介助、⑤水分補給、⑦おむつ交換、⑫ベッドメイキング、⑬コミュニケーション、⑭記録がそれぞれ80%以上を占め、1ヶ月の実習で技術的に習得できており満足に繋がっている。

2. 中期実習で課されている個別援助計画の立案は、担当利用者（対象者）のニーズを把握するため日々のアセスメントに多くの時間を費やしている。委託生は実習期間を逆算し個別援助計画を立案しているが、本科生の多くは3・4週目ギリギリまでアセスメントに時間を要しているため、実施回数も少ない。が、後期実習に向けては「できる」「なんとかできる」と自信をのぞかせている。

3. ストレスに関しては、委託生は実習1週目からストレスを感じている。家庭を持っている委託生も多くおり、上手く気分転換できずにいる。本科生は2週目、3週目と日を追うごとにストレスを感じている。双方とも精神的に日々のストレスが蓄積され、腰痛、寝不足等身体への不調も見られた。施設配置の学生内の中で相談し合い、更には巡回教員にも相談しているが「誰にも相談しない」の少数学生もいた。本科生は、身近な両親に相談しやすかった様子である。

4. 中期実習の自己評価については、委託生が「優」「良」と高く評価している。本科生は「良」「可」が大半を占め、技術面に対する不安を見せている。後期実習を頑張ろうという、次への達成意識が十分感じられる。

5. 今回のアンケート結果からはもっと多くの委託生・本科生の相違点が得られると感じていた。

日常生活上では様々な相違点を感じられるも、実習では極端な比較すべき相違点が見つからなかった。アンケート項目の見直しが必要である。予想する回答結果を確認することで、その結果に確信をもって教育実践に応用できると考える。

V 今後の課題

本研究は調査対象者数（委託生14名、本科生26名）が限定されている。また、本研究では中期実習時の振り返りのみの結果である為、後期実習終了後の振り返りとも比較し、検証していく必要がある。また、中期実習と後期実習の介護技術における到達度具合も重要視する必要がある。

今後の課題としては、さらなるアンケート項目の見直しをし、見やすく、回答しやすい点数評価を用いた、自由記述を少なめにした振り返りアンケートの作成に向け、検討を重ねていくものとする。卒業時までの更なる介護技術等の到達度が評価されることを目的に改善に向け、学生指導を行うこととする。

（受理日 平成29年12月19日）

引用文献

- 1) 厚生労働省：介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて 2008、12月
- 2) 弘前医療福祉大学短期大学部：介護実習の手引き（平成28年4月改訂）P13、2016

参考文献

- 峯尾武巳・黒澤貞夫：介護福祉士養成テキスト13 介護総合演習、建帛社、2009
- 武田啓子・高木直美：生活胃炎技術項目と卒業時到達度に関する研究 介護福祉学、2011、vol 18-2
- 牧田弘子・杉山せつ子：チェックリスト介護技術の要点、建帛社

**Social and technical skill attainment of certified social worker education program students
as seen through mid-term training :
Post-training reflection and comparisons between enrolled students
and job skills trainee students**

Yoko Soma¹⁾

1) Hirosaki University of Health and Welfare Junior College

Abstract

The purpose of our study was to clarify issues regarding attainment of nursing care skills through comparisons between the social and technical skill attainment between enrolled students and job skills trainee students of the “Comprehensive Nursing Care Seminar III” offered at our university. We focused on survey results obtained during mid-term training of students who have completed their courses on “Assisted Living Skills I” and “Assisted Living Skills II”, and have acquired adequate nursing care skills.

In addition, we analyzed and considered the similarities and differences between the two groups and used the data as a platform for re-examining the “Nursing Care Comprehensive Training” program. The data was also used to clarify future challenges in order to enable the promotion of a more effective and educational latter-term training program.

Key Words : certified social workers, nursing care training, nursing care skills